
仕舞われた記憶 ~おもらしからはじまる恋愛小説~

山下沙織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仕舞われた記憶 ～おもらしからはじまる恋愛小説～

【著者名】

山下沙織

【ノード】

N7937Y

【あらすじ】

衣替えを迎える、夏の体育着となつた日、寒い体育館での不安と緊張から激しい尿意を催す沙織。しかし、今日初めてブルマーを穿いて、幼なじみの涼と言葉を交わした時から、沙織は何かが違うと感じはじめた。

『こんなこと、前にもあつたよつた気がする・・・』

やがて友達に尿意を見透かされ、トイレに行くタイミングを逸し、沙織はパニックになる。

そのとき響きわたった先生の怒声が、沙織の記憶を呼び覚ます。心に浮かんできたのは、幼稚園で沙織が涼といつしょにおもらじしてしまったときの情景だった。衝撃的だったため幼い沙織の記憶から自然に消え去っていたその情景は、とても恥ずかしい姿を涼と見せあいながらも、不安と緊張から解放された、ふたりだけの暖かく楽しい出来事として思い返されてきた。

『涼くんはこのことを覚えてるの？』

時間のヴェールに包まれたふたり。そこで涼が話しかけてきた。幼いときからの運命的な絆を感じたふたりがその後とつた行動は？

R18 「びしょ濡れのブルマー」の体育館での設定をもとに、新たなテーマで書いた「スプラッシュ」シリーズの新作。初夏の高校を舞台に、幼い頃の恥ずかしくも心暖まる「おもらし」の経験が、ふたりを強い絆で結んでいくファンタジーを表現しました。

連れていった幼稚園は教育熱心なうえに規律が厳しくて、よくおもらしする子がいました。中には前を平然と押されて、漏らしてしまつ子もありました。

そんな中、とくに異性がおもらしする様子には、いつも私はドキッときせられていきました。ドキッとさせられたってことは、逆にその子から様々なセックスマピールを感じさせられたんだということを、私は後から気づきました。そのとき、さつと人生で初めてエロティシズムを経験した私は、その子のことが急に気になりだしたり、特別な気持ちを持つたりしました。

おもらしという出来事は、条件さえ重なればいつ誰を襲うか分からない、そう思ったのもこの頃でした。そして、それはやがて自分にもやつてきました。でも不思議なことに、自分がおもらしたときはある時点で記憶が飛んでいて、それ以後のことを見えていないことがあります。

きつとあまりに恥ずかしくて刺激の強い記憶は、幼い子の心から表面的には消え去るようになっていくのでしょうか。でも、それは心の奥に仕舞い込まれていただけで、私が少し大きくなつてからおもらしたときに、それが思い返されることがありました。おしつこく行けないパニック、限界を迎えて漏らす瞬間、暖かくなるパンツ、脱がされる服、そういう場面場面で、心では忘れていても身体が覚えているのです。

そして、おもらししたことが、そのときは恥ずかしさで真っ白だったはずなのに、思い出される感触は、なぜか優しくて、気持ちいい

ものでした。おもいししたときの温もりや、人にやさしく世話をしていたときには、自分が不安や緊張から解き放たれて、守つてもらえている感じや、それでいて恥ずかしい失敗をして注目されいる感じなど、よく分からぬけれど不思議な感じがしたことをずっと覚えていました。

もし幼いときに、ひとりじゃなく、彼氏（彼女）とこうしょにおもらししてしまったとしたら、そのときふたりは互いのことなどをどう感じるのか、そして、その忘れていた記憶が大きくなつて呼び覚まさることがあったとしたら、そして、それが恥ずかしくも楽しい記憶だったとしたら・・・

すいじく素敵な恋がはじまるかもしれない・・・

そんな恋のファンタジーを小説にしてみました。

漏らすなんて絶対にイヤ（一）

『漏らすなんて絶対にイヤ』

沙織は、エンジ色のブルマーから伸びる尻ひざを曲げるよじにして耐えながら涙を浮かべていた。「はやくいっしでよ」小声でそう言つた友達の声も、もう沙織には聞こえなかつた。

あたりがみんなの話し声でひときわ騒がしくなつたとき、急に先生の大きな声が響きわたつた。

「うぬせこや、みんなちゃんとしろ……。」

先生の怒鳴り声に、あたりは一瞬にして静まりかえつた。

衣替えになつたばかりの6月のある日、その体育館は肌寒かつた。近く予定されている全校の球技大会のために、給食のあと約5・6時限目を使って、体育館では競技説明や簡単な入退場の練習などが行われていた。クラスごとに男子と女子それぞれ2列になつて並び、先生や実行委員の説明を聞いていた。

学年カラーのエンジ色が袖口に入つた半袖シャツ。衣替えを迎える女子にとっては初めて袖を通す夏の体育着が初々しかつた。そしてシャツと揃いのエンジ色のブルマーはやや薄手のよつた気がしたものの、弾力がありしつかりしていた。

それに両脚を入れて、ショーツを包み込むようにしておきつとおしりの「△ムを上げたとき、今日その姿のまま男子の前に出る心もとなれ、恥ずかしさを、沙織は感じていた。

『なんだかう・・・いつもと違ひ』

鏡に映る姿は、中学のときに穿いた紺色のブルマーよりもマのラインがいつそう強調されている気がした。薄手のナイロンの生地が伸びるせいでそう感じるのか、それとも自分の身体が成長したからそう見えるだけなのか・・・沙織は鏡の前で身体の向きを変えながら、ブルマーから長く伸びる両脚を見てそう思つた。

漏らすなんて絶対にイヤ（2）

沙織は、進学校でもあるこの高校に入つて、中学とは全く違つ学習量の多さや授業の進み方の速さに戸惑つた。また、上級生から新たに下級生になつたことで、上下関係や新しい学校の習慣にも慣れなければならなかつた。そのため五月病になるような余裕すらないまま、あつという間に2ヶ月が過ぎた。

はじめての中間テストも何とか無事乗り越え、迎えた衣替えの6月だつた。それまで精一杯全力で走つてきた沙織には、ここへきて余裕とともに漠然とした不安が感じられはじめていた。それに球技大会は沙織の得意分野でなく、いつそう不安と緊張感に苛まれていた。

『こんなこと、前にもあつたよくな・・・』

沙織は思つた。

不安と緊張の中、次第に尿意を高まらせながら、沙織はさつき教室で久しづりに言葉を交わした涼のことを思つた。男子にしては華奢な身体つきだが、昔よりもすらっと背が伸びてモデルのような体型をしていた。なのに、爽やかな白い体育着の上から見せる女の子のような甘いマスクが印象的だつた。そんな彼の前で、今日のブルマ一の姿は不思議と恥ずかしかつた・・・初めて恥ずかしいと思つた。

「やだな、こんな格好」

教室を出たとき、沙織ははじめて涼に話しかけた。涼は幼稚園のときの同級生で、当時は仲良くしていいたことは覚えていたが、小学校は学区が異なり別々だつた。高校に入つて再会したもののは、長い

間の隔たりがふたりの気持ちをよそよそしくさせていた。しかし、ブルマーに穿き替えて教室を出たとき、なぜか涼に親しげに話すことができた。

「そう？　かわいいと思ひよ」

涼も、沙織の問いかけに、不思議と親しげに返事した。

「だつて・・・、恥ずかしいもん」

沙織はそう言いながら、恥ずかしいとは少し違う、不思議な気持ちを感じていた。

瀧川すなんて絶対にイヤ（ω）

立ち位置の確認のため入退場の練習をしたあと、今のような並びとなつて1時間ほどが過ぎようとしていた。給食のあと約2時間続き、寒い体育館での肌を露出した格好、身体を動かさないままの説明が、沙織の尿意を高めていったのは確かだったが、でもそれだけじゃないと、沙織は感じていた。

「沙織、トイレに行かせてもらひば?」

沙織の隣の友達が、沙織の異変に気づき耳打ちした。しかし、おしつけのことを気にしないよう気を紛らす努力を重ねていた沙織は、友達にそう声をかけられたことと自分の尿意を見透かされた思いになつた。そして、もう気を紛らわすことができなくなつた沙織は、

「うひこむつ・・・・」
「うひこむつ・・・・」
「うひこむつ・・・・」

と、切迫する尿意に次第にパニックに近い状態になりつつあるのを感じていた。身体から血の気が引いていき、脚も下半身も、ふだんの感覚を失いはじめていた。

『どうしてもトイレに行かなくちゃ、でないと・・・』

『これからビリカで行く機会が・・・それともこのまま・・・』

沙織は答えの出ない難問に自問自答しながら、結論が出せないまま、ずるずると時間の流れに飲み込まれていった。その時間が刻一刻と

沙織の尿意を高めていった。

『漏らすなんて絶対にイヤ』

沙織は、Hンジ色のブルマーから伸びるヒビを曲げるよつとして耐えながら涙を浮かべていた。「はやくいってよ」小声でそう言つた友達の声も、もう沙織には聞こえなかつた。

あたりがみんなの話し声でひときわ騒がしくなつたとき、急に先生の大きな声が響きわたつた。

「ひめこ、みんなちゃんとしり…」

先生の怒鳴り声に、あたりは一瞬にして静まりかえつた。

心に仕舞われた記憶（一）

『みんな、ちやんとしろ・・・』

先生が怒鳴ったその言葉とともに、沙織の心にある情景がよみがえろうとしていた。それはとても衝撃的な出来事だったため、当時幼かつた沙織の記憶から自然にかき消され、心の奥にしまわっていたものだった。

「みんな、ちやんとしなさい・・・」

不意の先生の怒鳴り声に、いつも以上に身体がびくついたサオリだつた。

”じやああああ・・・”

その音に誰よりもびっくりしたのはサオリだった。急にパンツの中が暖かくなつた。視線を落とすと、自分の短パンの下腹部から無数の水滴があふれ出していた。サオリはそれが自分のおしつこだとはまだ信じられずについた。透明で匂いもないその水は、激しい音を立てて床に飛び散つていた。すると、

”じやじやじや・・・”

隣の列のすぐ後ろにいたリョウの短パンからも、透明な水が時おり太ももを伝わせながら流れ落ち、床に広がつていいくのが見えた。

「あ～・・・、もうしちゃった・・・」

壇上の先生が呆れたように苦笑いした。

「はやく、おしゃりに行つていらっしゃい」

ベランダの近くにいた先生が決まり文句のよつに言つた。しかしすでにパンツを濡らしてしまっているのに、今更トイレに行つてもどうなるものではないことは、幼いサオリでも分かつていた。

それでも、リョウは先生に促されるように、下腹部から水流を滴らせながらも、トイレのある隣の教室へと続くベランダに歩いていった。サオリもリョウのあとをついてベランダに出た。しかしそうたと歩いていつたリョウの歩みが突然遅くなつた。サオリが視線を上げると、リョウのお尻からさつきよりも勢いを増して太い水流が太ももを伝うのが見えた。『リョウくんよほど我慢していたのが太ももを伝うのが見えた。』とサオリは思つた。

サオリもリョウのつしろで立ち止まるごとに、まるでそれに促されるよう、自分の下腹部からお尻にかけて、さらに熱い水流が勢いよく渦巻くのを感じた。その暖かさとともに、器楽の練習を前にしてサオリを支配していた不安や緊張感が、いま一気に解けて身体ごと樂になつていぐを感じていた。

心に仕舞われた記憶（2）

やがてタオルなどを手籠に入れて先生がやつてきた。ふたりを隣の教室の片隅に連れてていき、サオリとリョウの間に立った先生は、手籠を置いてしゃがんだ。

「ふたりとも脱いで、おしつこを拭かなくちゃね」

先生はまずサオリに背を向けると、リョウの前にしゃがんで彼の短パンとパンツを順番に続けざまに下げているようだった。リョウのお世話がまず先なのか思っていたサオリだったが、次の瞬間先生が自分のほうへ向き直り、自分の短パンとショーツを一気に下げたので、サオリは思わず動搖して内股によるめいた。たぶん先生はサオリの世話を先にしてあげたかったが、男の子より先に女の子のパンツを下げてはかわいそつだという、ちょっとした配慮があつたらしい。

すぐにタオルを持った先生の右手が力強く、サオリの下腹部や両脚などを拭きはじめた。

びっくりして目を伏せていたサオリだったが、おそるおそるリョウを見た。先生の肩越しに上半身はトレーナーを着たまま下半身だけ露にされて立っている彼がかわいらしかった。が、自分も彼からそう見えていることをすぐにサオリは悟った。

「サオリちゃん、うしろ向いて」

先生はサオリを後ろ向きにさせると、彼女の濡れたお尻いや太ももを拭いた。

『こまわたし、つまづくんにお尻をみられてる・・・』

サオリは思った。さつき下腹部を見られたのも恥ずかしかったが、この頃のサオリは、自分の見えない角度からお尻を見られていることのほうが恥ずかしく感じた。

先生は、

「机の上で足ばたばたして拭いて」

と言つて、拭いたタオルをサオリの横に置いた。

心に仕舞われた記憶（3）

サオリはその上に乗つて足をばたばたさせながら、ふとリョウのほうを振り向いた。先生の新しいタオルがリョウの下腹部を包み込むようにあてがわれ、凹凸の隅々まで丁寧に拭かれていた。そのたびにリョウも腰を少し動かして、気持ちよさそうだった。本当はくすぐったいのかもしれないが、サオリがさつき拭いてもらつたときは確かに気持ちよかつた。

『気持ちいいよね・・・?』

サオリがそう思いながらリョウのほうへ向き直り、下半身裸のまま彼に田配せすると、彼もサオリを見つめ、なぜか爽やかに微笑みあつた。

「わらじ」とじゃないでしょ、ふたりとも。もうすぐ1年生になるつていうのに、どうするの?」

先生がそう言いながら、ふたりをむけむけにリョウを後ろ向きにした。上にたくし上げられたトレーナーの裾から丸見えになつている、彼の丸く切れ上がつたお尻りがかわいらしかつた。自分もせつせつ、きつとそう見られていたに違ひない、そう思つと、リョウとの間に急に親近感が沸いてきたのだった。

「ふたりとも、パンツが乾くまでこれ穿いてね

先生は手籠から同じエンジ色のパンツを2枚取り出した。

穿いてみると、裾が丶の字に切れ上がったブルマーのようなパンツだった。でもサオリは驚きはしなかった。以前から、おもらしした子がこうこうパンツを穿くのを見ていたからであった。誰が見ても一旦でおもらししたと分かるパンツ。これを穿いている子は恥ずかしくてかわいそうに感じていたこのパンツを、いま自分が穿くことになつたことに、サオリは恥ずかしさの裏で不思議とわくわくした気持ちを感じていた。

穿いてみると、毛糸でできているそのパンツは、ぴったりとやせしくサオリのお尻を包み込んだ。

『恥ずかしいけど、気持ちいい。。。気持ちいいけど、恥ずかしい。。。』

ふたりはすぐに楽器を持って、さつきまで並んでいた列に戻るよう促された。たくさんのお尻「」を漏らしたはずの床は、分からなにように綺麗に拭かれていた。

恥ずかしいけど不思議な気持ち（一）

ステージへの入場のため、男の子の列が先に動いた。エンジのパンツを穿いた彼のかわいらしいお尻りが、サオリの目の前を通過していった。

『リョウくんとおやりこのパンツ』

鍵盤ハーモニカを吹きながら、サオリは両手の先に見える自分のパンツに何度も視線を落とした。恥ずかしいVのラインをかもし出しているブルマーのような形をしたパンツ。そしてサオリは時おり遠くのリョウを探した。講堂に差す柔らかな陽の光の中で、人の間から垣間見える彼のエンジのパンツを。演奏中も帰りの会のときも、サオリは自分のパンツに目をやりながら、彼のパンツを探していた。おもらしして心細いので、自分と同じ仲間を探したい、そういう気持ちもあったかもしねいが、それだけではなかつた。

おもらししたのが午後だったので、濡らしたショーツや短パンは乾いておらず、ふたりはそのままバスで帰ることになった。家にはその連絡がされていた。

いつものように、リョウの右隣にサオリが座った。座った姿勢で目を落とすと、自分のパンツのVのラインがより深く切れ上がつて見えた。サオリは改めて今日自分がしてしまった失敗と、いまの自分の格好を恥ずかしく思った。でも隣に目をやると、リョウのパンツも同じだったので、サオリは少しほほつとした。

サオリはおもらししてから初めてリョウに話しかけた。

「おひるい・・・、漏りじやせつたね

「うそ・・・、サオリ、どう漏りじやせつたの?」

「先生の声」、びっくりした・・・コロウさん?

「僕は、サオリがおじつ」漏りじやせつした・・・コロウさん?

「

「もうだつたの・・・」「みんな、コロウくん

「うん・・・」

「コロウさん、恥ずかしい?」

「恥ずかしい・・・でも

「でも、何?」

「なんだか不思議・・・

「うそ・・・、わたしも不思議・・・

「僕たちだけだもんね」

「いっしょだもんね。なんだか、楽しによね

「うん楽し」

「やうだ、またいっしょにおもひこなつか?」

「サオリがおもいししたときせ、僕もいつしょに漏らす」

「私も、リョウくんが漏らしちゃつたら、いつしょに漏らす」

「そしたらまた、こんなふうに帰れるね」

「そうだね、そうしようね・・・」

沙織は幼稚園のときに自分がおもしらしかったことは覚えていた。それは洗濯して乾いた自分の短パンとショーツを後日先生から渡されて持ち帰った記憶があったからだつた。でも、おもしらしかったときの一部始終はこのときまで覚えていなかつた。それはとても恥ずかしくて衝撃的な出来事だったため、幼かつた沙織の記憶からは消え、心の奥に仕舞われていた、それが今、記憶の糸を手繰り寄せるようによみがえつて来たのだと沙織は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7937y/>

仕舞われた記憶 ~おもらしからはじまる恋愛小説~

2011年11月24日21時55分発行